

## 令和7年度 教育課程特例校実施状況（自己評価・学校関係者評価）

### 1. 教育課程特別校としての取り組み

本校では、多様性を重視し様々な履歴を持った生徒たちを受け入れ、彼らの能力や適性を更に伸ばす教育環境を提供している。多くの帰国生、外国籍生徒、二重国籍生徒などが在籍し英語・数学・理科・社会の4教科を英語でのイメージ教育を行うことで総合的な英語力の進歩を図り、共に協力して、学び合う多様な教育を実践している。更に、令和8年度より高校の2年生からDDP(Dual Diploma Program)のWACE(Western Australian Certificate of English)のカリキュラムの本格的な導入によりオーストラリアの高校と日本の高校の卒業生の卒業資格を取得でき、全世界の大学進学を可能にできるプログラムの導入が開始される。

### 2. 学校評価（自己評価並びに学校関係者評価）

	自己評価		学校関係者評価	
	評価	現状・課題・反省	総合評価	意見・要望
指導体制	A	本校には、26名の外国人教員が勤務している。日本人教員と同様にHRクラス担任や授業教科指導などお互いに連携をしながら生徒指導・保護者会・授業カリキュラム・指導案・試験などの作成を行っている。定期的な教員研修と自己研鑽の推奨、授業観察の導入により学校全体の教育力の向上に努めている。	B	「指導体制」 令和8年度の混成ホームルーム運営では、固定担任を置かず約10名の教員が4クラスをローテーションする体制が採用されたが、担任不在による統率の不明確化と、学年をまたいだ教員配置が組織的な弱さを生んでいる。HR自体は朝15分の連絡・朝礼機能に留まり、合唱等のクラスイベントでも課程別チームに分かれるなど混成の意義が希薄化し、英語話者と日本語話者の交流促進という当初の目的は十分に達成されていない。多文化環境への接触や自己組織化の訓練という長所は認められるものの、交流を実質化する「仕掛け」の不足と言語ミスマッチによる情報格差が課題として残るが、生徒同志のコミュニケーションの広がる機会には貢献した
授業内容	A	PBLを中心として授業カリキュラム・指導案・試験を作成している。授業を始める前にトリガークエッション（問い）を与え、学習の関心度を高めて自ら学ぶ姿勢を重視している。授業は、C:創造的思考の問いを生徒に与え、各自が持つ知識から個人とグループでの討論とプレゼンテーションから授業を開始し、生徒の学習への関心度を高める工夫をしている。学期ごとの評価は、PBLの成果をもとにA:知性・知識、B:応用・発展、C:創造的思考のルーブリックで行われている。		「授業内容」 カリキュラムはオーストラリア標準に基づく国際水準の枠組みを持ち、数学・英語・公民（Humanities）・理科分野（Science）の選択科目も充実しているが、時間割のA/Bスロットの構造上、一方のクラスに受講者が4～5名に偏るなど学習体験の格差が生じている。ま
生徒への対応	A	HRでは、IT(International Teacher)とJT(Japanese Teacher)のダブル担任制を実施しており、英語と日本語での担任業務での連携を実施している。生徒だけでなく、保護者への対応も英語話者には、対応できるようになっている。授業では、PBLを中心に実施して生徒の学習意欲の向上を高める工夫を構築している。		

情報提供	A	<p>学校 HP や配布のパンフレット、学校説明会などにおいて本校の実践しているイマージョン教育を説明している。シラバスやルーブリックなども学校 HP に公開し、4月の段階で1年間の学習計画を可視化している。また、各学期には Reflection Sheet を記入して生徒それぞれの振り返りに機会としている。</p>	<p>た、学期途中の教員交代があり、補充人材の質にばらつきがあることで、物理担当が複数回交代した事例のように学習の継続性が損なわれるケースが確認されている。英語話者教員への役割多重化（複数学年・主任・担任兼務等）が一因とみられ、来年度以降の学年拡大で必要教員数が増加する見込みであることから、人員計画や役割分担の見直しが必要と感じる。</p> <p>「生徒への対応」  メンター面談（1学期1回・15分程度）や学期内3回の進路ガイダンスなど、個別支援の基盤は概ね整っており、保護者・生徒の満足度も良好な水準にある。Google Classroom の Morning Self-Check を通じた日常的なフィードバック収集は機能しており、教員への不満を起点に実際の人事対応が行われた事例が示すように、学校側の応答性は一定水準を確保している。一方、生徒の進路希望により AG と本科の分離が強くなることは高校では仕方がないことではあるが、異学年・異課程間の深い交流にの機会を設けられると更に良い教育環境になると思われる。</p>
効果	B	<p>朝学習（IXL アメリカの e-learning）や PBL 授業、定期試験や課題などを評価指標に加え、外部試験の TOEFL や IXL の試験などを活用して学力の進捗を測っている。英語力の向上に加えて、思考力（ロジカル・シンキング、クリティカル・シンキング、クリエイティブ・シンキング）やコミュニケーション能力などの向上に努めている。</p> <p>昨年度、実力試験としてアメリカの MAP 「Measure of Academic Progress」という試験を導入する予定であったが、1年間延長して令和8年度よりこの実施により英語で学習している生徒との学力の伸長分析をする予定で計画をしている。</p>	
その他	A	<p>中学の総合の時間（本校では iTime と称している）の充実を図るために iTime コーディネーターを配属して3年間のカリキュラムの更なる向上に務める。</p> <p>高校では、International Course Advanced Group において西オーストラリア州の教育プログラム（WACE: West Australia Certificate of Education）が実施される。その準備として WACE コーディネーター、大学進学アドバイザーを配属する。</p> <p>海外の大学進学の地域カウンセラーの体制を強化する。カナダ、アメリカ、ヨーロッパ、オセアニア、アジアの各地域の専属担当のカウンセラーの配属を実施する。また、アメリカ、オーストラリアなどの大学の AO を本校に招待して海外大学進学説明会を実施している。</p>	

評価点

A:評価できる      B: やや評価できる      C: やや評価できない      D: 評価できない